安曇野市公民館報

安曇野市
中央公民館
No.58 2021.1.6
TEL71-2466

令和２年度安曇野市文化祭

10 月から 11 月にかけて、穂高地域を除く各地域で文化祭が行われました。この展示作品の中から選ばれた作品が、３月に豊科交流学習センター「きぼう」で開催される安曇野市総合芸術展で展示されます。

三郷

今年の三郷祭は、コロナウイルス感染防止のため、文化産業展と菊花展のみの開催となった。

文化産業展は10月10日から11日まで三郷公民館で開催された。コロナ禍の中にありながら６００点を超える出展があり、来館者の目を楽しませた。

講堂には三郷小・中学校をはじめ16団体と６人の個人から絵画や書道、工芸品の出展があった。別室には、こどもいけばな教室の生け花や三郷昆虫クラブの昆虫標本などが並び、ロビーには押絵が展示された。例年並みの力のこもった作品が鑑賞できた反面、抹茶・コーヒーのふるまいや友好都市交流作品展示が中止となり残念であった。

来館者からは「いろいろな行事が中止となる中、開催していただきありがとうございました」「地域の方々の発表の場は本当にすばらしく、良い時間がもてた」「出品者の皆様、さらに高みを目指してください」などの感想が寄せられ、文化産業展開催の期待の大きさを感じ、地域づくりになくてはならない行事になっていることに気づかされた。

菊花展は、11月2日から9日まで三郷公民館ロビーで開催された。盆栽作りやダルマ作り、三本仕立てや七本仕立て、ドームなど79鉢の菊の鮮やかな色彩とかぐわしい香りが館内を満たした。

「数年前と比べて、仕立て方や花の形状などの点で質が向上していると思います」「細かなところまでよく手入れされ、素晴らしかった。心が洗われる」など、素晴らしい菊を鑑賞し心が満たされた参観者から出品者の努力に寄り添った声が寄せられた。

堀金

堀金地域文化祭は、10月30日から11月1日まで堀金総合体育館で開催された。今年は芸能発表会と堀金一周駅伝は中止となったが、作品展は例年通り開催した。

地区の団体やサークル、こども園から老人クラブまで幅広い年代の作品が展示された。小・中学生の絵画、書道、工作などの学習の成果が発揮された作品も多数出展され、３日間で７００人余が来場した。

公民館講座「菊づくり物語」で育てた福助・ダルマ・スプレー菊や、下堀菊友会の鮮やかな菊花が会場を彩った。

堀金児童館や堀金社協デイサービス、見岳荘など福祉施設利用者の作品、小田多井老人クラブの押絵や工芸、田多井サロンの折り紙細工、田多井公民館のフラワーアレンジメントなどの出品があった。

短歌会会長の青柳邦栄さんは、

「赤飯を炊きたい気分燕来る」

「吉見生家を守る人いて蝉時雨」

と詠んで出品した俳句の部でも選者の一席に入選した。青柳さんは、若い人にも短歌や俳句に興味を持ってほしいと語っていた。

堀金中学校３年生の金屏風の作品では、木の葉や花を一枚一枚貼ることで四季の移り変わりを色あでやかに表現したり、金屏風に舞う鶴を鮮やかに描いた作品などが目をひいた。

堀金小学校は波の絵を描いたペン立てや伸び伸びと書かれた書道、花いっぱいのカラフルな小鳥を描いたストロー人形などの作品を出品した。

コロナ禍の困難な世相の中にあって、健康に留意して活動に参加し、技術向上のため日々作品作りに励んでいる姿がうかがわれる作品展であった。

豊科公民館大ホール ピアノリレーコンサート

豊科公民館は、11月7日、ピアノリレーコンサートを開催した。大ホールのコンサート用グランドピアノを多くの人に弾いてもらい美しい響きを感じてもらったり、大ホールの魅力を知ってもらいたいと初めて企画した。

コロナウイルス感染予防対策を万全にし、18組31人が1組5分以内で演奏を披露した。ピアノソロの他に、ピアノとケーナ、カホン、オカリナ、鍵盤ハーモニカなど、他楽器とのアンサンブルもあり、いろいろな演奏を聴くことができた。演奏者がたすきをつないでリレーする予定だったが、常念岳の写真に折り鶴を飾っていくことでたすきのかわりにした。

演奏者は「広いステージで緊張したが楽しく弾くことができた」「コロナ禍で発表の場がなく気持ちが沈みがちだったが、これからの活力になった」と発表の喜びを感じていた。

会場では、来場した50人の観客がグランドピアノを中心とした音色を十二分に味わい、盛大な拍手を送っていた。

明科

明科地域文化祭は、10月31日から11月1日まで明科公民館で開催された。コロナ禍のため恒例の芸能発表会は中止し、開催期間も短縮するなど、規模を縮小しての開催となった。作品展示は例年通り行われ、公民館玄関前には懸崖菊や盆栽菊などが華やかに飾られていた。

10月31日に講堂で行われたお楽しみサロンは、明科高校の吹奏楽部の演奏で幕を明け、ピアノ演奏やダンス、舞踊、詩吟と地域住民の日頃の成果が披露された。今年はメンバーがそろっての練習も困難だったと思われるが、見ごたえのある演奏や演芸に約60人の来場者は盛んに拍手を送っていた。

11月1日の晩秋コンサートは、MAB（まぶ）の皆さんによる昭和・平成の懐かしいヒット曲が演奏され、65人の来場者が演奏を楽しんだ。Mix Age Bandの頭文字をとってグループ名にしたというバンドで、30代から70代までのメンバーが息の合った演奏を披露した。

ホールや会議室には、個人や団体の方たちの作品が展示された。編物や洋服が展示されている部屋では作品を見ながら交流を図る方々がいたり、別の部屋では木彫の展示を見ながら「小さい作品から始めるのかしら」と話しながら作品を鑑賞する方がいた。ホールには喫茶コーナーもあり、歓談している様子を見ると、日常生活で外出に制限がある中、文化祭の開催は地域に暮らす人々の元気につながっていると感じた。また、明科地域の小・中・高校生の作品は例年より出展数が多く力作も見られた。特に中学校から出展されたフェルメールやゴッホなどの絵画をアレンジして描かれた作品は面白く「真珠の耳飾りの少女」をアレンジした作品のタイトルが「耳飾りをつけていない私」や「百均の耳飾りの少女」などと斬新で人目を引いた。

今年は地域住民が運動会や音楽会などの学校行事を見る機会がなかったので、地域文化祭の開催で学校と関わりが持続できたことは有意義であったと思われる。

豊科

豊科地域文化祭は、10月29日から11月15日までの間、2会場で開催された。コロナウイルス感染防止のため芸能発表会は中止となった。

豊科交流学習センター「きぼう」会場

菊花展は、10月29日から11月1日まで豊科交流学習センター「きぼう」回廊中庭で開催された。大輪、ダルマ、福助、盆栽菊、懸崖など、各種の菊が出展された。豊科公民館の「楽しい菊作り講座」の受講生もたくさん出展し、その中の高木登晤さんが大輪の部で最優秀賞を受賞した。

10月31日から11月1日までは、多目的交流ホールで書道展・フラワーアレンジメント展・華道展が開催された。完成度の高い書や水墨画、華やかな花が並ぶ会場は華美であり、心が洗われるようだった。

例年、2階ロビーで行われていた茶会は、コロナウイルス感染防止のため残念ながら中止となった。

豊科公民館会場

11月6日から8日まで、公民館2階の各部屋で美術・一般作品展が開催された。例年に比べると全体の出展数はやや少なかったが、写真の出展が多く、さまざまなジャンルの写真があり見ごたえがあった。個性あふれる絵手紙や木彫り・刺しゅう・藍染め・繊細なマクラメ・鮮やかな色のハワイアンキルト・古布のパッチワーク・色とりどりのてまりなどの楽しくなる作品が数多く出展された。今年は、在宅の時間が長くなり、細かい作業にもじっくりと取り組んだと思われる作品が多いように感じた。

11月14日には16人が参加して短歌大会が行われた。コロナ禍の中で自分を振り返る時間がたっぷりあったためか身近な日常生活を詠んだ歌が多かった。例年より時間を短縮しての歌会となったが、充実した会となった。

11月15日には俳句大会が行われた。今年は小・中・高校生対象のジュニアの部の募集は行われなかった。一般の部も句会は行わず、表彰式のみを行った。

穂高公民館講座

穂高地域では、地域文化祭は中止しましたので、穂高公民館で開催した講座を紹介します。

わら籠作り教室

11月6日、趣味の講座「わら籠作り教室」の3回目を開催した。講師は、工房「藁（わら）や」の鈴木由加利さん。鈴木さんは約10年前に明科に移住して家庭用の稲作を始めた時、稲わらを無駄なく活用したいとわら細工を独学で習得した。現在ではわら細工の制作、販売とわら細工教室を開催している。

全7回の講座で、材料の下準備をし、籠の胴体を編み、丸くして底を編み、最後に持ち手を付けてわら籠が完成する。多数の申込者の中から抽選で選ばれた12人が受講し、昨年度受講者のうち3人が講師の助手を務めた。

受講生の1人は「少し難しいがとても楽しい。先日道の駅でわらの販売を見つけ、うれしくて購入してしまった。お正月には家のしめ飾りを作りたい」と話していた。

皆、熱心に取り組んでおり、同じ籠だが個性が見える作品となっていて完成が楽しみである。

故郷の地質を知り地震災害に備える

10月22日、自然環境・体験（防災）講座「故郷の地質を知り地震災害に備える」を開催し、12人が参加した。講師は、明科高校教諭の遠藤正孝さん。遠藤さんは学生時代からフォッサマグナ（大地溝帯）の研究をしており、最近では信州大学震動調査グループメンバーとして松本・安曇野地域の「揺れやすさマップ」作成に関わった。

前半の「地震の基本と郷土の地質を知ろう」では、日本付近が幾つものプレートが衝突し合う地域になっていること、安曇野は本州中央部を東西に分割するフォッサマグナの西縁の糸魚川・静岡構造線が通る地域であることなどが説明された。

後半の「揺れやすさマップを防災に活かそう」では、地震の揺れは地震エネルギーの大きさ（マグニチュード）だけでなく地盤にも影響されるので、地元の揺れやすさマップを活用して自分の住む地域に対応した防災・減災の配慮をしてほしいと語った。

受講者は、分かりやすい説明と市内のどこの地域が揺れやすい地域なのかという身近な話に、熱心に聞き入っていた。

夏の乗鞍高原滝巡り

8月4日、里山トレッキング講座「夏の乗鞍高原滝巡り」を実施した。6月上旬に予定していたが、コロナ禍のため延期しての開催となった。40人以上の申し込みがあったが、バスの人数制限のため抽選を行い13人が参加した。

長かった梅雨が明けたばかりの晴天の朝、バスに乗り最初の目的地である番所大滝に到着。大滝をつくる小大野川は梅雨明けで水量が多く、展望台で雄大な滝の水しぶきを浴び、参加者の歓声が上がった。

滝を見学後、小大野川沿いの散策路を千間淵経由で約1時間歩く。全員がここを歩くのは初めてで「いい体験をした」と話していた。快晴の青空に乗鞍の峰々が映える乗鞍高原観光センターで休憩をした。一同で記念撮影をした後、次の目的地、善五郎の滝に向かった。

林の中の散策路を約1時間歩き、善五郎の滝と乗鞍岳が一緒に見える絶景スポットの滝見台に到着。山は霧が立ちこめていて、残念ながら乗鞍岳は見えなかったが、滝の前に下りると、ここでも滝の水しぶきが気持ちよく「マイナスイオンを感じる」という方もいた。

滝を後にして約40分歩いた牛留池で昼食後、バスで三本滝レストハウス駐車場に向かった。駐車場から三本滝までは徒歩で25分。趣の違う3本の滝を感慨深く眺めながらしばし休憩した。

帰路の散策路には、高原の初秋を感じさせるリンドウの花が咲き始めていた。

欅

▼コロナウイルスの影響でできるだけ外出を控えていたので、渋柿むきを手伝うことになった。300個むくには結構時間がかかった。干し柿の完成が楽しみだ。（H・N）

▼生活スタイルの一変した昨年、一歩進んだ新しい時代に慣れ、次のパンデミックに備え自分を進化させたいと誓う。（K・Y）

▼千葉県から安曇野市に移住して5年。安曇野は公民館活動が活発で素晴らしいと思う。コロナ禍の中でも工夫して活動されている方々に敬意を表したい。（Y・I）

▼新しい生活様式を実践しつつ、「牛の歩みも千里」のことわざを胸に精進したい。（M・Y）

▼コロナ禍の聞き慣れない言葉が「今年の文字」を選ぶかのように、言い得て妙なほど世相を表している。普段の暮らしの、当たり前のありがたさに、気付かせてくれて、ありがとうである。（T・Y）